

「アセンズのタイモン」（シエイクスピア）

アセンズ（即ちアテネ）の大富豪にして大貴族のタイモンは、法外な迄に「氣前がよく、慈悲深い」人柄で有名であつた。何しろ他人を露程も疑はず、近づく全ての者を友人として受入れ、誰にでも惜しみなく贈物を與へ、友人から乞はれるが儘に多額の借金を肩代りしてやる、といった具合だつたら、慕ひ寄つて来る者の數が絶えなかつた。そんな様子を見て皮肉屋の哲學者アペマンダスは、「なんてまあ大ぜいのやつらがタイモンを食ひものにしてゐる」事か、「やつこさんにはそれがわからぬい」、「まつたく氣ちがひ沙汰だ」と呟くが、タイモンは、「もしわれわれが助け合ふことがないとしたら、友だちを持つ何の必要があるでせう」と宣つて、友情の美しさに「喜び」の涙を流し、忠實な執事フレイヴィアスから野放圖な散財の危ふさを幾度警告されても一向に耳を藉さうとしない。

だが、實は今やタイモン家の「金びつはすつかりからつぽ」で、執事の遣繰りで何とか體面は保つてゐたものの、多額の借金を抱へ、土地も抵當に入つてゐた。そしてタイモンは遂に自ら借金の返済を迫られるに至るが、「俺には友人といふ財産がある」とて、なほも友情を信じてやまず、かつて面

倒を見てやつた友人達に借金を申込むと、誰もが言を左右にして拒絶する。その噂を聞いてある外國人が云ふ。「ああ、人間が恩知らずな本性をあらはしたときほど醜怪なものはない」。

タイモンは怒り狂ひ、友人達を罵倒して、「にやにや笑ひの、ごますりの、憎むべき寄生蟲め、お上品ぶつた人殺しめ、親切さうなおほかみめ」ら、「人間やけだものに取りつくかぎりの、あらゆる悪疫に取りつかれて、できものだらけになりやがれ！」、「アセンズなんぞ沈没してしまへ！ これからは、人間が、人類全體が、タイモンの憎惡の的だ！」と叫び、アセンズを捨て海岸に近い森に走る。「ここでは最も殘忍なけだものでも、人間よりはきつと親切だらう」と信じたからだ。そして草の根を食ひつつ洞窟に潛み、訪ねて來た執事の變らぬ忠節によつても人間不信を和らげる事は無く、全人類を呪つて死んで行く。海岸に遺された墓石には、「ここにわれタイモンよこたはる、予は生けりしとき、あらゆる生ける人間を憎みたり」云々と彫りつけてあつた。

この作品は未完の儘放置されたものだといふ説が今日では有力らしい。慥かに、前半と後半とで激變するタイモンは、アペマンダスの云ふ様に、「人間性の兩極端だけを知つて、中庸を知らぬいかに陰翳に乏しい男で、觀客の共感を誘ふ成熟した悲劇的主人公とは云ひ難いし、また、委細は省くが、他にもこの作品には見過せぬ瑕瑾は少くない。けれども、「リア王」の「死産した雙生兒」とのD・ウィルソンの評もある様に、近い時期の作と推定される「リア王」との類似は紛れもない。忘恩の餌食と

なつて、^{けだもの}獸にも劣る人間の「醜怪」を呪詛^{じゆそ}するリア王の狂亂^{きやうらん}は、正にタイモンのそれである。メルヴェルが書いてゐる。「シエキクスピアがハムレット、タイモン、リア、そしてイアアゴアの如き暗い登場人物の口を通して巧みに語り、それとなく仄^ほめかすのは、恐しいばかりの眞實としか我々には思へぬ事でもなので、誰であれ善良な人間が、きちんとした顔附で、そんな事を口にしたり、暗示したりするだけで、狂氣にも等しいと看做されかねない」。いかにも前半のタイモンは愚かしい。けれども、人の世の「恐しいばかりの眞實」に目を塞^{ふさ}ぎ、今なほ底抜けの性善説の憲法を戴く國民に、タイモンの滑稽な迄の善良を嗤ふ資格なんぞありはしない。(八木毅譯、「シエキクスピア全集八」、筑摩書房)